

# 美しい人生のために



## 館野佐保

[106-0047] 東京都港区南麻布5-16-4  
フリーランスライター、  
専門は生命科学、文章コミュニケーション、  
info@sahotateno.com  
www.sahotateno.com

冒険好きな人生を送ってきました。訪れたことのない場所を訪れ、異文化の人々と語り合い、地球上のリアルな世界を自分自身の目で確かめたい。そんな願いのもと、今では十数年前の大学院卒業時に掲げた「バイリンガルの科学ライターになる」という夢が実現しました。*Nature* 特派員の取材同行や、連載執筆など数々の経験はありがたく、思えば遠くへ来たものです。

これまでの笑顔の背景には、涙や焦りもありました。女性ならば美しく生き続けたいと、理想とするスタイルや美意識があったとしても、人生は格好いいときだけではありません。働く女性として、母親として、私の生き方は、これで良いのだろうか—そう自問自答しながら、今に至っています。

女性の生きる道は、意外にも、自分の意思で決断をしなければならないシーンがたびたびあります。進学、就職、結婚、出産、再就職などといった「何をするか？」に加えて、「いつするか？」というタイミングはさらに自分を考え込ませてしまうものです。他者から見るとスムーズな人生だったとしても、現代を生きる女性は一人一人、複雑な状況をめぐって思考を続けているはずです。

また、TVドラマや報道など、マスメディアによって形作られる女性像と、リアルな女性との間には、イメージ・ギャップがある場合も。良妻賢母に始まり、勝ち組に負け組、リケジョ、イクメンに協力をあおぐ……例を挙げたらきりがありません。しかし文献を紐解くと、女性は随分と昔から、そういった偏見と向き合ってきたことがわかります<sup>1)</sup>。

たとえば月刊『化学』（化学同人）の筆者の連載<sup>2)</sup>で、「女性と科学論文執筆」の回では英国ヴァージニア・ウルフ<sup>3)</sup>の時代（フェミニズム第一波）を取り上げました。その次の時代（フェミニズム第二波）では、まさに「イメージ・ギャップ」が大きく議論されたそうなのです。当時、第二次世界大戦後の社会に生きる女性へ向けて「個人的なことは政治的である」という命題が掲げられました。女性ひとりひとりがもつ内面の葛藤は、一見とても個人的なようであり、歴史的・社会的な背景が

あるというのです。当時、「第二の性」（シモーヌ・ド・ボーヴォワール<sup>4)</sup>）や「新しい女性の創造」（ベティ・フリーダン<sup>5)</sup>）など、女性の書いた作品が女性の活躍を支えていったのも興味深いです。

さて、日本では、男女雇用機会均等法の施行から30年の年月が流れ、女性の生き方は多様化しています。一方で、将来を見据えて少子化問題がこれほど叫ばれている社会にあって、不妊治療のハードルの高さや待機児童問題、母子の貧困問題など課題もいまだに山積しています。

理系の研究などに携わる現代の女性は、知的で優秀な人材が多いです。でも、変化していく人生において、次への一步を踏み出すのには、理屈を超えてさまざまな感情がともなうのは自然なことではないでしょうか。

悩み抜いた末つかみ取った今日の自分の一日は、なんだか愛しく思えます。疲労があれば休養をとり、何気ない繰り返しの毎日を穏やかに与えてあげることこそが、授かることができた子どもへの愛情なのではないかと思っています。東日本大震災の経験を通じて、その意識は強まりました。また、さまざまな要因を言い訳にしないで、決めたお仕事は形にする。欲張らない潔さや集中力さえあれば、困難を乗り越えて、お仕事は続けられるはずです。

今の筆者には、世界中を旅する大冒険は、ライフスタイルにはありません。でも、日常を舞台に仕事と私事でワクワク・ドキドキして、人生の冒険が続いています。社会的役割において責任を全うし、諦めずに上を見上げ、歩き続ける。これこそが美しい人生なのだと、この頃ようやく気付けた気がします。

## 文 献

- 1) “フェミニズムの名著50”, 江原由美子, 金井淑子編, 平凡社
- 2) 館野佐保, 英語科学論文の執筆をめぐる旅, 月刊化学, 2014年1月号~2015年12月号, 化学同人
- 3) ヴァージニア・ウルフ, “自分だけの部屋”, みすず書房
- 4) シモーヌ・ド・ボーヴォワール, “第二の性”, 新潮社
- 5) ベティ・フリーダン, “新しい女性の創造”, 大和書房